

グローバルな視点に立つ地域プログラムの開発

—岡崎市子ども国際理解セミナーの実践—

行 田 臣 (愛知教育大学教育実践総合センター研究協力員)
土 屋 武 志 (社会科教育講座)
(2004年10月29日受理)

Development of a “Local study” program based on the global view

Jin YUKUTA (Assistant staff of Center for Research, Training and Guidance in Education Practice, Aichi University of Education)
Takeshi TSUTIYA (Social Studies, Aichi University of Education)

要約 地域のグローバル化に伴い、文化や言語、生活習慣の相違によるトラブル、いじめや犯罪など、様々な問題があらわれてきた。学校教育では、国際理解教育などの充実が期待されている。しかし、国際理解教育は教科としては独立して存在せず、地域のグローバル化という視点から見ると、十分なものとは言えない。そこで本論文は、グローバルな視点に立つ地域プログラムとして開発・実践した、教育プログラム「子ども国際理解セミナー」を紹介する。

Keywords : 地域のグローバル化, 子ども国際理解セミナー, 国際理解教育

【はじめに】

愛知県のほぼ中央に位置し、豊田市に隣接する岡崎市¹は、外国人の増加とともにグローバル化が進み、文化や言語、生活習慣の相違によるトラブル、いじめや犯罪など、様々な問題があらわれてきた²。

しかし、岡崎市はNPO団体も少なく、市民の中での対応が円滑にしているとはいえない。このような状況の中、岡崎市は2003年に「国際化推進プラン」の策定を行い、グローバル化に対応した共生社会づくり³に本格的に取り組み始めたところである。

一方、グローバル化に対して学校教育では、国際理解教育などの充実が期待されている。しかし、国際理解教育は教科としては独立して存在していない。そのため、社会科や、総合的な学習の時間が実質的に国際理解教育の担い手としてその役割を担ってきた。

しかし、その取り組みは地域のグローバル化という視点から見ると、十分なものとは言えない。

そこで、本研究は岡崎市子ども国際理解セミナーの実践をもとにグローバルな視点に立つ地域プログラムのあり方を検討するものである。

1 【岡崎市子ども国際理解セミナー】

岡崎市における外国人登録者数の変遷を見ると、当初韓国・朝鮮籍の人々が最も多かった。しかし、入国管理法の改正をうけ、1990年代初頭から人手不足を補うために外国人労働者が増加した。特にブラジル国籍

の人数は急増し、2003年3月末では、4184人と岡崎市における外国籍市民の最も多い構成員となっている³。その他の外国籍市民も増加傾向にある（韓国・朝鮮国籍の人々を除く）。また、外国籍市民の多くが定住を希望していることから、増加傾向はますます続くと考ええる。

このような状況に対し、2003年にOIA（岡崎市国際交流協会）⁴は、岡崎市のグローバル化に対応していく子どもの育成を目的にした「子ども国際理解セミナー」を企画・実施した。これは愛知教育大学との共同開発プロジェクトとして実施され、筆者も学習プランの作成及び、その実践に参加した。

このセミナーは、「未来を担う子ども達に、岡崎市の現実と世界の各地域で暮らす人々の様子や文化、またそれらの歴史的背景を学ぶことにより、相互理解を深め、「共生」社会実現への足がかりとする」ことを目的としたものであった。

このセミナーでは、基本プログラムを愛知教育大学が作成し、それを準備委員会において検討し、実践を行った。尚、準備委員会は、岡崎市役所市民文化部文化国際課国際交流班、OIA、愛知教育大学（総務部企画課、助教授土屋武志及び、筆者）の代表5人を中心⁵に結成された。

プログラムは、これまで国際理解といえば、国外のことを主な学習対象としてきたが、地域に重点をおき、作成した⁵。なぜなら、本論冒頭に指摘したような地域社会の変化から、地域を見ること自体が、グローバルな社会を見ることになっているためである。つまり、「local」と「global」が混在しているため、子どもた

ちの視点からすれば、「think locally」の学習がグローバルな学習とならざるを得ない現実が存在している。

また、プログラムのコンセプトとして以下の5点が導き出された。

①関係性をもたらす影響に気づく場面の必要性

相互依存性の強まる今日においては、その関係から地域社会に何らかの影響が生じるはずである。このため、輸入されているものなどの表面的な事実理解にとどまらず、その相互依存関係が地域にもたらす影響に気づく場面が必要である。

②外国籍市民の人間性理解の必要性

現在の日本には多様な国籍や文化を持った人々が生活している。このことから、多様な国籍や文化を持った人々と直接かかわり、地域におけるその人々のおかれた状況や、感じ方、考え方など、その国籍を超えて自分たちと同じところや、異なるところなど、人間性を理解する場面が必要である。

③社会へかかわる場面の必要性

自分たちの生活や社会を行政や他人任せにするのではなく、自らの意思で社会を作っていく意欲を持ち、主体的に考え、行動することが求められる。つまり、地域的課題を解決するために、自ら社会へかかわり、行動する力を育成するために、社会へかかわる場面が必要である⁶。「地域で活動すること (act locally)」も、グローバル社会で活動することと言える。

④重層的な社会の構成員としての自己に気づくことの必要性

環境問題などグローバルな問題を考えるとき、地域の問題としてではなく、地球的な問題としてなど、多様な立場から考えなければ、一面的な見方となってしまう。つまり、子どもたちは、地域の一員であるとともに、国家、地球の一員であるという重層的な社会の構成員として生きていかなければならない。このことから、重層的な社会の構成員としての自己に気づく場面が必要である⁷。

⑤コミュニケーション能力の育成の必要性

「コミュニケーション能力」とは、英語などの言葉が話せることのような言語技術だけでなく、ノンバーバル (非言語) コミュニケーションも含んで、人に自分の考えを伝える力、話を聞く力なども含んだものである。子どもたちは、外国籍市民を含め、地域の多様な人々や世界の人々とかかわって生きていく。そのためには、子ども同士のかかわりを重視し、人とかかわる場面をくり返し設定し、コミュニケーション能力を高めなければならない。

また、相互依存性の増すグローバル社会では、協働がより求められる。そのため、自分だけで考えるのではなく、他人と考えることの良さなど、協働する活動の設定が必要になる。

これらのコンセプトを実際の学習プログラムに生か

すため、より具体的な学習活動の形で整理したのが以下の表1である。尚、表1の番号①～⑤は上記のコンセプトの番号とリンクしている。

表1 「グローバル化に対応した学習プログラムにおける必修的学習活動」

- | |
|--|
| ①地球社会とのかかわりや、地域の中の外国籍市民などに出会わせる活動
②子どもが身近な生活・地域の中のグローバルな現象を自覚的に見出す活動
③課題を発見し、その解決をしようとする活動
④立場を変えて地域を見直す活動
⑤協働する活動 |
|--|

以上のコンセプトと学習活動を取り入れ作成したのが、以下の子ども国際理解セミナーである。

II 【2003年度子ども国際理解セミナー】

2003年度の子ども国際理解セミナーは、岡崎市内在住の小学5、6年生37人の子どもを対象に4回 (各回約3時間)、岡崎市役所にて行われた。

実践するにあたり、岡崎市役所市民文化部文化国際課国際交流班は、子どもの募集や、事務処理、必要機材の準備などを行った。また、OIAのサポーターは、毎回の紙芝居の読み聞かせ、休憩時間のレクリエーション、第4回目のティーパーティーなどを担当した。

実施したプログラムには、

(1) 「地域におけるグローバル化の現象を探る」

「校区に住む国籍の異なる多様な人々の生活場面の写真」(複数) や、校区や市内に住む外国籍の人の数などから地域に住む多様な国籍の他者の存在を確認する。

(2) 「多様な人々と共生するためのアイデアを考える」

愛知教育大学の留学生との交流を通して、「いろいろな国の人も、ほくたちも、より住みやすい岡崎にするにはどうすればいいか」アイデアを出す。

(3) 「アイデアの練り直し」

子どもたちのアイデアは、不十分なものが出されると予想し、アイデアを練り直す時間を設けた。

(4) 「アイデアを発表する」

アイデアをまとめたポスターを使い、グループごとに発表する。

以上の4つの段階を設けた。実践の成果としては、

- ・ 子どもに外国籍市民の立場から地域を見直させることができたこと。
- ・ 地域のグローバル化に気づかせることができたこと。

などがあげられる。しかし、

- ・ 共生のためのアイデアを考えさせたが、実際に行動化できなかったこと。

- ・ 地域の外国籍市民と直接かかわる場面を設定できなかったこと。
- ・ 地域に出てグローバル化の現実を確認する場面がなく、実感が弱かったこと。
- ・ ブラジル人がもっとも多い岡崎市の特色があまりプログラムに入っていなかったこと。

などの課題が残った。尚、実践したプログラムは資料1に掲載した。

III 【2004年度子ども国際理解セミナー】

2004年度の子ども国際理解セミナーは、岡崎市立美合小学校⁸の児童26名（5，6年生）を対象に，3回（各回約6時間）実施する。会場も美合小学校を中心に展開する。

プログラムに関しては，2003年度の実践結果を踏まえ，ブラジル人が多いという岡崎市の特色を学ばせることに加え，

- ① グローバル化の現実を確認するため，地域に出ること。
- ② 子どもたちが，地域の外国籍市民と直接かかわること。

の2点の新たな目標として加え，プログラムを作成した。

プログラムには以下の3つの段階を設定した。

(1) 「地域のグローバル化をとらえる」

第1回目に岡崎市内で最もブラジル人が住んでいる県営本宿団地に行き，そこで活動する人々の話や，フィールドワークをする。また，ブラジル人学校「エスコラサンパウロ」⁹の見学などの活動を行う。

(2) 「多様な文化を学ぶ」

第2回目に愛知教育大学の留学生や，市役所に勤務するラモンさんなど出身国の文化や生活などについて語っていただく。さらに，エスコラサンパウロの子どもたちと，自分たちの学校を紹介する活動や，サッカーの合同練習，ティーパーティーなどを通して交流を行う。

(3) 「共生社会実現のためのアイデアを考える」

世界のために活動をしている市民の人々の話を聞くことで活動している人々の存在に気づくとともに，その思いや考えを知る。この活動から，社会へかかわる意欲を高め，自分たちにできる共生社会実現のためのアイデアを考えさせる。

2004年度は，昨年よりも地域に住む多様な人々の参加があり，より充実したプログラムを作成することができた。尚，2004年度実施予定のプランを資料2として掲載した¹⁰。

【おわりに】

このプログラムは時間の制限があり，受講した子どもたちが実際に考えたアイデアを直接的には実現することはできない。しかし，子どもたちが学校の総合的な学習の時間などで，自ら学びつづけていくことを望む。このような地域の人々とのかかわりや，連携こそ，これからの学校教育には重要なものになる。今後とも，子ども国際理解セミナーの発展に努めるとともに，小学校の授業として実践するためのプログラムの開発にも力を注いでいきたい¹¹。

¹岡崎市は人口約35万人の中核市であり，名古屋大都市圏の東部圏域を形成する西三河の中心都市である。

²<http://www.pref.aichi.jp/kokusai/tourokusyasuu/touroku.html> 愛知県ホームページ 県民生活部国際課 愛知県内の外国人登録者数は，159,235人（平成14年現在）で過去最高記録を更新し，県内の総人口の2.2%となっている。また，市町村別の内訳では，最も多いのが名古屋市で53,882人（33.8%），次に豊橋市15,417人（9.7%），豊田市11,381人（7.1%），岡崎市8,326人（5.2%）の順となっている。

³岡崎市ホームページ「岡崎市統計書」2-2外国人登録の推移及び，市民課資料（2003年）より <http://www.city.okazaki.aichi.jp/shokai/tokei/tokei2002/tdata/d0202.htm>

⁴1985年に設立され，「さまざまな活動を通して，市民レベルの国際交流や外国都市との相互理解を推進し，国際社会への関心を高めると共に，国際化時代に対応できる人づくり」をスローガンとしている。

⁵魚住忠久 『グローバル教育』 黎明書房 1995年 p42

グローバル化に対応した学習の視点として魚住忠久氏が指摘するように，「think globally, and act locally（地球規模で考え，地域で行動する）」の重要性が言われている。

⁶米田伸次「提言：国際理解教育とグローバリゼーションー設定の理由と今後の課題ー」『国際理解』33号 帝塚山学院大学国際理解研究所 2002年 p91

この点については米田伸次氏も，グローバリゼーション時代を生きる人間を育む教育について，「それぞれに自分でできるところから行動していくということに他ならない」と，行動化の必要性を説いている。

⁷魚住忠久 『グローバル教育の新地平』 黎明書房 2003年 p160参照

⁸全校生徒約300人。6年生は総合学習「美合再発見プロジェクト」として地域に根ざした学習を行っている。

⁹ 2000年に設立。安城（本校）、岡崎（分校）に校舎をもち、日本滞在中の子どもたちに、ブラジルの教育基本法に則ってポルトガル語での授業を行う学校。生徒数は約300人。

¹⁰ 10月16日(土)に第1回を実施した。第2回(11月13日)、第3回(12月4日)を予定している。

¹¹ 筆者は、小学校4年生の社会科地域学習としての学習プランを作成した。

拙稿「グローバル化した地域に対応した社会科地域学習単元の開発 - 「think globally, and act locally」を目指した実践の検証を通して-」『探求』 2004年 愛知教育大学社会科教育学会 参照

*本稿は、土屋武志との共同研究のもと行田が執筆した。

資料1 「2003年度 子ども国際理解セミナー実施プログラム」

●第1週 「岡崎の中の世界」

(目的) 岡崎市や自分の身の回りには多様な国籍の「ヒト」が住んでおり、外国とかかわる「モノ」があることに気づき、自分たちのくらしが世界とつながっていることを理解する。

(活動) 145分

時間	内 容
5分	世界の民話の読み聞かせ
30分	①初めての週であり、子どもどうしがお互いに知らない者同士である。そこでゲーム（私は誰でしょうゲーム）を通じて緊張をほぐしつつ、4人のグルーピングを行う。
50分	②実際にまちに住む多様な国籍の人の写真や新聞の切り抜きなどを各班に1セットずつ配布し、「目撃者ゲーム」をする。
20分	休憩（5分）＋ゲーム（15分）
10分	③岡崎市には多様な国籍の人が何人くらい住んでいるのか予想する。また、どこ出身の人が多だろうか予想してみる。
10分	④市役所に勤めるラモンさん、パトリシアさんの話を聞いた後、日常生活で自分が関わる多様な国籍の人についての経験などを自由に出し合う。
10分	⑤会場で飲んでいるジュースについて、どの国からやってきたのか、班ごとに調べ、世界地図に商品名を記入したポストイットを貼り付ける。
	⑥次の時間にいろいろな国の人が来ることを告げる。

●第2週 「いろいろな国の人とお話ししよう」

(目的) 日本で暮らすいろいろな国の人々の考え、思いに気づくとともに、様々な国による考えの違いや文化の違いに気づき、自分なりの課題を持つことができる。

(活動) 140分

時間	内 容
5分	世界の民話の読み聞かせ
40分	①いろいろな国の人に各グループに入ってもらい、自己紹介ゲームをして、かかわりやすい関係をつくる。 無人島ゲームを行い、考えの違いや同じ点を確認する。
45分	②国際交流員や留学生をはじめとしたいろいろな国の人に、質問したり、話をきく。愛知に来た理由・生活する上で困ったこと、注意していること・岡崎のよいところ/よくしてほしいところなど。(30分)
20分	休憩（5分）＋ゲーム（15分）
25分	③留学生などと相談しながら、グループごとに「いろいろな国の人、ほくたちも、より住みやすい岡崎にするにはどうすればいいか」アイデアを出す。(15分) ポスターセッションにより、理由をつけてアイデアを発表する。(10分)
5分	④子どもたちの考えについて、コメンテーター（ラモンさん、石川さん）に意見をいただく。

●第3週 「自分たちに何ができるかな？」

(目的) 第2週の交流から学んだことを生かし、多様な国籍の人がもっと住みやすい岡崎市にするには岡崎市民として自分たちはどうしたらよいか考えることができる。

(活動) 155分

時間	内 容
5分	世界の民話の読み聞かせ。
10分	①実況中継ゲームをする。
85分	②もっと多様な国籍の人も住みやすい岡崎市にするために、今、自分達にも出来ること。及び、将来、大人になったときにどうするべきか、考えてきたアイデアを出し合い、自分たちの主張を決める。(20分) 間宮さん、成瀬さんに行政、ボランティアからの取り組みを紹介していただく。(10分) コメントをもとにアイデアを練り直し、2つに絞る。(30分) 確認印もらったアイデアから発表内容を決定する。(5分) 発表資料のデザインの案を考える。(20分)
15分	休憩+ゲーム
40分	③発表用の資料製作

●第4週 「私たちのPR」

(目的) 自分の考えを分かりやすく他の人に伝えるために工夫し、意欲的に取り組むことができる。

(活動) 200分

時間	内 容
30分	①(発表準備)第3週で作成した原稿の見直し及び、ポスターの手直し等、発表の準備を行う。
20分 (10分 ×2)	②発表会 グループで作成したポスターを使い、グループごとにまとめてきた成果を保護者・留学生・サポーター等の前で発表し、質疑応答により、聴衆から意見をいただく。
10分	③講評
15分	④終了証を授与する。
10分	⑤休憩
10分	⑥世界の民話の読み聞かせ
100分	⑦パーティー ・ゲームー国旗パズル，What is this? ・ティーパーティーー世界のお茶を飲んでみよう ・もう一度歌おうーRock my Soul, Acha pacha noche, 蚊が出てきたぞ
5分	⑧セミナースタッフ紹介・おわりの挨拶

資料2：2004年度子ども国際理解セミナー

【第1回】「岡崎の今を知ろう」

(目的) フィールドワークを通じ、グローバル化が進展している岡崎の現状を理解する。

(活動) 390分

	時 間	内 容
		(スタッフ) 集合, 市バスで美合小学校へ
①		(美合小児童・スタッフ) 集合, 市バスで県営本宿住宅 大集会所へ 受付 (出欠確認, 名札配布, デジカメで顔写真撮影)
②	30分	(1) 国旗パズル (インドネシア/スリランカ/フィリピン/ブラジル/ミャンマー), (2) 世界地図場所あてゲーム, (3) おかざきクイズ ・国旗パズルに登場した国が, 世界地図上でどこに存在するか, またその国の人が岡崎市内に 何人くらい住んでいるか, 沢山住んでいる国の順番を推理する
③	10分	(1) 県営本宿住宅 棚田町町内会 手塚文夫さんの話/質疑応答
	10分	(2) ボランティア日本語教師 加藤和彦先生 (上地小) の話/質疑応答
	10分	(3) 町内会通訳 大熊スミカさんの話/質疑応答
④	25分	話を聞いて, 自分たちの住んでいるところと同じところ, 違うところについてグループで話し 合った後, 発表する
⑤	5分	トイレ休憩
⑥	60分	本宿団地ガイドツアー ～町内会通訳: 大熊スミカさん, 管理人: 神谷英子さんといっしょに～
⑦	40分	各自持参の弁当にて昼食
⑧	20分	午後から「エスコラ・サンパウロ」へ行くことを伝える ・見てみたいこと, 先生や児童に聞いてみたいことを各グループ3つずつ考える ・美合小学校との共通点・相違点 (両校にあるもの, ないもの)などを予想する
⑨	40分	市バスで六名本町のエスコラ・サンパウロへ
⑩	60分	エスコラ・サンパウロ訪問 ・学校見学のほか, ⑧で準備した質問等に基づいてグループ別に質疑応答
⑪	40分	市バスで美合小学校へ
⑫	40分	今日のふりかえり・感想文記入, 次回の説明
⑬		(美合小児童) 解散

【第2回】 「多様な文化を学ぼう」

(目的) ゲストの方々の話や, ワークショップ, エスコラ・サンパウロの児童との交流を通して, 多様な文化について学ぶ。

(活動) 330分

	時間	場 所	内 容
	10分	美合小学校	アイスブレーキング
①	60分		《必修講座》 光ヶ丘女子高校の生徒さんと田中先生によるスリランカの話
②	10分		休憩
③	40分 (20×2)		《選択講座》 ・愛知教育大学の留学生 (中国, ミャンマー他) の話 ・市国際交流員: ラモン, OIA国際交流員: パトリシアの話
④	20分		講座を聞いて考えたこと, 思ったことなどをグループで話し合う。
⑤	40分		昼食 (この間にエスコラ・サンパウロの児童が合流)
⑥	60分		(前半) レクリエーション (サッカー, 長縄跳び) (後半) 学校見学
⑦	60分	美合小学校 家庭科室	ティーパーティー ・互いの言葉が分からなくても出来るような歌, ゲーム等 ・パーティーで食べているものの原産国や輸入元の国を調べて, 世界地図にシールを貼る
⑧	20分		グループで1日の感想を話し合う。
⑨	10分		グループの代表がグループの感想をまとめて発表する。
⑩			今日のふりかえり・感想文記入, 次回の説明

・⑧前回お世話になった県営本宿住宅の方々もご招待する。

【第3回】 「自分たちに何ができるかな？」

(目的)

- ・身近な地域で活動している人々の話を聞き, 彼らの存在に気づくとともに, その思いや考えを知る。
- ・誰もが住みやすい岡崎にするためのアイデアを考える。

(活動) 280分

	時間	内 容
①	10分	アイスブレーキング
②	40分 (20×2)	《必修講座》 ・光ヶ丘女子高校の柴田チサさんによる地雷の話 ・わんぱく寺子屋代表の柴田くす子さんの話
③	10分	休憩
④	40分 (20×2)	・O I C C他言語スタッフ: 永井太郎さんによるブラジルの話 ・O I A事務局およびボランティアサポーターによる話
⑤	40分	昼食
⑥	10分	紙芝居
⑦	40分	グループディスカッション ・話し合いテーマ: 「誰もが住みやすい学区, 岡崎市にしていけるために, ぼく・わたしたちに出来ることはなんだろう」
⑧	60分	ポスター作り ・話し合った結果を, 各自A4サイズの画用紙などにポスター形式でまとめる
⑨	30分	修了証授与